

視聴率絶好調のまま終了したドラマ「半沢直樹」ですが、普段、大河以外のドラマを全く見ない私ですら全回見てしまいました。過去に邦銀と外銀に勤務し、金融一筋の人間としては、内容に突っ込みたくなることも結構あったりするのですが、毎週見ずにはいられていませんでした。

日本の銀行では、支店長と言えれば一般企業の社長のようなものです。そもそも通常の支店勤務の銀行員には支店長より偉い本店の取締役と接する機会などはほとんどありません。ですから銀行の常務取締役と言えれば、雲の上の様な存在なのです。その様な存在の人物に銀行員があのような態度で接することは常識では考えられませんが、だから面白い。

最終回のラストシーン、大和田常務と半沢への意外な処遇ですが、気になることがあります。大和田常務の行った二つの不正行為は、特別背任罪に該当する可能性が非常に高いということです。半沢が取締役会で明らかにしたように、財務内容が極度に悪化し街金まで手を出している大和田の妻の会社に対し、銀行から通常の手続きを経て直接融資することは不可能であるため、大和田は自らの手のかかった融資先を通して迂回融資を行っています。これは、銀行で常務取締役という会社（銀行）経営に重要な役割を果たしている者が、自己（妻の経営会社）の利益を図る目的で、実質破綻状態の企業へ迂回融資を行っており、その結果回収が滞れば銀行に財産上の損害を与えることとなります。特別背任の場合、未遂でも犯罪が成立します。

同様に、運用で高額な損失を計上し、経営に重大な問題がある事実を把握しながら、羽根専務との個人的関係からその事実を隠蔽し融資を指示した伊勢島ホテルの件については、未遂罪として特別背任罪の成立はほぼ間違いないでしょう。

常務取締役が特別背任罪で逮捕ということになれば、銀行が受けるダメージは金融庁検査で引当金不足を指摘されるレベルではありませんし、直前の検査でその事実を発見できなかった金融庁も世間の批判を受けることになるでしょう。その結果、「おねえ」黒崎検査官も減点対象になるでしょう。そして、そのような行為を二度も行った常務取締役を平取、つまり通常取締役への降格で済ますというこの銀行は、半沢の言う通りガバナンス（企業統治）とコンプライアンスに相当の問題がある銀行だと言わざるを得ません。いずれにしても取締役会で大和田の不正行為を認めさせた半沢次長は見事でした。最後に個人的な事情を持ち出して大和田に土下座をさせたのはサラリーマンとしてはやりすぎでしたが、それが半沢の魅力でもあるのでしょう。それが証券会社出向の理由となったとしたら残念ですが・・・いずれにしても半沢次長、お疲れ様でした。

さて、新卒の就職活動において銀行の内定を得るということは、半沢のようなバブル大量採用組を含めて、その時点においては「勝ち組」に分類されると言っていいいでしょう。私が学生の時には「銀行の内定がとれる人は、どこの企業の内定でもとれる」と言われたものです。従って、今の学生もそうでしょうが、せっかく就職活動を「勝ち」抜き、内定を得て、希望と自分なりの理想を持って入行した銀行で定年まで働きたいと思うのは、典型的な日本人マインドとして自然なことです。減点主義評価を採用する銀行や役所のような日本の巨大組織において組織や上司の方針に逆らうような言動をする事は、将来の昇進のための致命傷になりかねません。

銀行に入ったまっさらな新卒行員のマインドは、そこで働き続けるうちに、徐々にその組織の「価値観」に染まっていきます。なぜなら自らの組織以外の価値観を知らないし、知る必要もないからです。自分の組織の価値観が「常識」となり、それは必ずしも世間の「常識」とは一致しません。日本の大企業が新卒採用に執着するのはそのためです。下手に「外界」のことを知る人間は、日本の銀行や役所のような官僚組織においては、鬱陶しい存在でしかないのです。そして、正論を主張し、不正を暴き、暴露し、断罪する半沢のような存在は、まさに日本型官僚組織にとって鬱陶しく邪魔な存在でしかないのです。そういう者は排除されます。だから「半沢直樹」は面白いのです。

さて、意外かもしれませんが旧日本軍には「半沢」のような人がいたのです。こちらはフィクションではありません。軍隊組織であれば、上官に逆らうことなど絶対に許されません。まして戦前の軍隊です。もし軍隊で上官の意に反するような発言をしたらどんな処遇が待っているかわかりません。それが戦争中であれば危険な最前線に異動させられることもあります。「関連会社への出向」などと言う生易しい話ではないのです。しかし、実は日本の旧海軍には「半沢」のような人物が存在したのです。

「日独伊三国軍事同盟」についてはご存じの方も多いのではないのでしょうか。1940年に日本、ドイツ、イタリアの三国で結ばれた軍事同盟により、日本の対米戦争はもはや避けられない情勢となっていきました。この三国同盟に反対していたのは海軍の「良識派の三羽烏」と呼ばれた米内光政海相、山本五十六次官、そして井上成美軍務局長の三人でした。あの真珠湾攻撃を提案、主導した山本五十六はご存知の方も多いでしょう。さて、この三人の中で三国同盟に最も反対していたのは井上成美（しげよし）です。米内は親しい友人に「三国同盟に反対ということでは井上が一番なんだよ。どんなことがあっても井上は承知しないよ」と言っていました。

三国同盟を推進した陸軍の意図としては、仮想敵国のソ連をドイツと挟み撃ちにするところがありました。井上が三国同盟に反対した理由は、

①経済的な理由として、日本経済と軍にとって重要な資源である石油と屑鉄の輸入の大半を米英に依存しており、同盟により米英を敵に回せばその供給が絶たれる

②軍事的な理由として、独伊は日本から地理的に遠すぎて相互扶助が不可能である

③ヒトラーは「マインカンフ（我が闘争）」で、有色人種を蔑視してドイツ民族による世界征服を企んでおり、いずれ破たんするのは明らかである

ということであり、当時いかに井上が先見の明を持っていたかがわかりますね。これらの井上の懸念はその後、すべて現実となっています。当時の海軍軍人たちは、ヒトラーの「我が闘争」を読んで「ドイツはすごい、ヒトラーのようなすごい男はいないぞ」と言っていたのですが、それに対し井上は「馬鹿、もっとよく読め。その本は日本をクソ味噌にけなしているんだ。ヒトラーは日本人なんか認めていないんだ」と返します。彼らは日本の悪口はすべて削除された日本語翻訳版を読んでいたのですが、英語・ドイツ語が堪能で語学の達人である井上は原著のドイツ語版を読んでいたのです。井上は海軍に軍務局長名で、ヒトラーの対日認識に関する通達を出しています。結局井上の主張は及ばず、1939年10月の人事異動により支那方面艦隊参謀長となり、翌年に三国軍事同盟が締結されてしまいます。

遑って1933年には、海軍軍令部の独立の問題が発生します。戦前の陸軍には、軍の行政部門を所管する陸軍省と、作戦などの統帥事項を所管する参謀本部があり、参謀本部は大元帥である天皇へ直属していました。これにより、陸軍大臣といえども参謀本部をコントロールすることができませんでした。しかし、当時の海軍軍令部はまだ海軍省の一部局であり、海軍大臣の権限下にあったのです。これを軍令部は陸軍のように改正してしまおうとしたわけです。

当時の海軍軍令部長は伏見宮博恭王元帥であり、皇族の海軍トップとして絶大な権力を持ち、海軍人事をも牛耳っていました。その伏見宮の指示により、軍令部の権限を大幅に強化する改定案が軍令部から海軍省に示されました。当時の海軍省の担当者は、軍務局第一課長であった井上でした。軍令部側の代表者は軍令部第二課長の南雲忠一であり、井上の海軍大学校卒一期上でしたが、この危険な提案に同意しない井上に対し何度も「お前のような奴は殺すぞ！」と脅迫します。

旧日本軍において、海軍では海軍大学校、陸軍では陸軍大学校の何期目の卒業であるかは、現在の銀行の入行年次と同様、「先輩」「後輩」の序列を意味し、昇進を左右する重要

なファクターです。しかし井上は南雲の恫喝に対しても、用意してあった遺書を見せて「俺を殺しても俺の精神は曲がらない」と却下します。井上が決裁しないと本案は成立しませんので、伏見宮は大角岑生海軍大臣を呼んで圧力をかけます。伏見宮の圧力に屈した大角は何とかこの案に同意してくれないかと井上に懇願しますが井上は

「自分が正しくないと思うことに、私は同意出来ません。同意しろと言われるのは、私に節操を捨てろと迫られるに等しく、私は節操を捨てたくありません。どうしても通す必要があるなら、一課長を更迭してこの案に判を押す人を持って来られたらよろしいでしょう。私としても、事態を紛糾させた責任は感じております。今日まで、正しいことの通る海軍と信じて愉快地御奉公して参りましたが、こんな不正の横行する海軍になったのなら、私はそのような海軍にいたくありません」

と回答し、自らの意志を貫くのです。その結果、軍務局第一課長を交代させられてしまいます。その後この案は天皇に上奏されますが、天皇はこの改正により軍令部が海軍省の所管である行政事案に過度に介入する危険性を理解しており、「これでは陸軍のようになりはせぬか」という懸念を大角に伝えます。それはまさに井上が懸念していたことだったのです。結局提案は天皇に裁可されますが、伏見宮も「井上をよいポストにやってくれ」と口添えしたといえます。井上が遺書を用意したということは、戦前の軍組織において、組織の方向性、まして伏見宮という、天皇でさえ一目置く宮様の意図に反して自分が正しいと思うことを通すのは命がけだったということです。自分の出世、昇進を気にしていたら絶対に不可能なことです。

日米開戦の前年、1940年に海軍航空本部長となった井上は、「新軍備計画論」を作成し、海軍大臣（及川古志郎）に提出します。皆さんもご存知のように旧日本海軍は後に「大和」や「武蔵」の様に世界最大級の巨大戦艦を建造しましたが、航空機の発達により既に大艦巨砲の時代は終わっていることを井上は見抜いていました。事実、大和も武蔵も敵航空機の雨あられの攻撃により沈没しています。日本軍はあの日露戦争の日本海海戦における艦隊決戦の勝利の栄光が忘れられなかったのです。要するに自己満足なのです。

この「新軍備計画論」は、同年に海軍軍令部が作成した「第五次海軍軍備充実計画案」を批判した井上が対案として作成したもので、井上は軍令部の予算請求の首脳会議において、

「この計画を拝見し、かつ、ただいまの御説明を聴くに、失礼ながらあまりにも旧式で、これではまるで明治・大正時代の軍備計画である…かようなずさんな計画に膨大な国費を費やし得るほど日本は金持ちではないし、仮にこの計画通りの軍費が出来たとしても、こ

んなことでアメリカに勝てるものではない。軍令部はこの要求を一応引っ込めて、とくと御研究になったらよいと思います」と発言します。

井上は同計画で「大艦巨砲の艦隊決戦のごときは、アメリカの艦隊長官が無知無謀でない限り起きようがない」

と述べており、後に「戦艦なんか造ったって、飛行機が進歩したらだめだぞ、戦にならないぞという考えは、二、三年前の昭和 12 年頃から私の頭にあった。大きな戦艦なんか造るのはむただ、と会議があるたびに出したわけです」と回想しています。実際の太平洋戦争においては一度も艦隊決戦は起こらず、日本海軍の艦船は米軍戦闘機や潜水艦の魚雷に次々と撃沈され、最後には作戦遂行能力を失ってしまいました。さらに井上は同計画で、

「日本が米国を破り、彼を屈服することは不可能なり。米国は、日本国全土の占領も可能。首都の占領も可能。作戦軍の殲滅も可能なり。又、海上封鎖による海上交通制圧による物資窮乏に導き得る可能性大」とまで指摘していたのです。

しかし、残念ながら井上の理論は当時の海軍首脳にはあまりにも斬新すぎて理解不能であり、結局海軍は巨大戦艦作りに邁進していきます。

1941 年、日本は南部仏印進駐を行い、その結果石油の大部分を輸入していたアメリカから対日石油輸出全面禁止、さらに教科書にも出てくる ABCD 包囲陣（米・英・中・オランダ）による経済制裁措置という結果を招き、日本は経済的に完全に追い込まれてしまいます。南部仏印進駐は陸軍主導で行われたものですが、実は海軍の対米強硬派の集団である「第一委員会」があまり乗り気でない陸軍を突き上げて行わせています。それを事前に聞かされていなかった井上は、

「そのような対米戦争に直結する一大事に海軍が簡単に同意したのはどういうことか。私の所管する航空戦備は全く出来ていない。なぜ、事前に我々の意見を聞かないのか」と非難します。

さらに、弁解する及川古志郎海軍大臣に対し

「そんなことで大臣が務まりますか。南部仏印進駐に文句を言ったのは、手続き上の問題ではなく、事柄が重大すぎるからだ」と怒鳴りつけるのです。

その後も井上は航空装備の現状について及川や、永野修身軍令部総長に説明し、対米戦争をしないように説得しましたが、彼らは聞き入れませんでした。

その結果井上は1941年8月に第四艦隊司令長官を任命され、海軍中央から体よく左遷させられてしまいます。珊瑚海海戦などの実戦を指揮し、1942年10月、山本五十六連合艦隊司令長官の推薦により海軍兵学校校長に就任することになります。

戦況が悪化しもはや日本の勝利は望めなくなった1944年7月、東条英機内閣に代わり小磯国昭内閣が成立し、あの海軍の三羽烏の一人、米内光政が海軍大臣に就任します。ちなみにこの時点で山本五十六は搭乗機が撃墜され戦死しています。そして井上は海軍次官として中央に戻り、米内海軍大臣に、

「現在の状況はまことにひどい。私の想像以上で、日本は負けるにきまっている。一日も早く戦をやめる工夫をする必要があります。今から、いかにして戦争をやめたらいいかの研究を、ごく内密に始めますから、大臣だけ御承知願います。及川軍令部総長にだけは私から申し上げておきます」と伝え、密かに終戦に向けた工作を開始します。その実務担当には海軍省人事局長の高木惣吉少将を指名します。

1945年3月に硫黄島が陥落し、本土空襲が毎日の様に行われるようになると、井上は米内に「一日も早く戦争を止めるべきだ、一日遅れるだけで何千何万という日本人が無駄死にする」と進言しています。結局米内は終戦へ向けた迅速なアクションを取ったとは言えず、井上が指摘したように、いたずらに敗戦を先延ばししたことにより、何十万という日本人が犠牲となってしまいました。一つだけ残念なのは、この間に米内から海軍大臣を井上に譲るといった話があったのにも関わらず、井上が固辞したということです。もし自らの信念のためには命も厭わない井上がこの話を受けていれば、終戦時期をもう少し早められた可能性があるのではないかと思うのです。

戦後、井上が死去する一年前の1974年、風邪をこじらせて入院していた井上は、発熱した時に体を震わせて、

「早くしないと若い者たちがどんどん死んでしまう。早くなんとか急がねば…」と叫んだといっています。

さてここまでは過去の文献や資料に基づいて井上の言動を紹介したのですが、ごく最近、井上が海軍兵学校校長を務めていた時に入学した早坂暁さんという作家の手記が新聞に出ていました。これはどの文献や資料にも出ていないと思いますので、最後に紹介したいと

思います。

戦争終盤、お国のために戦うため海軍兵学校に入学した 15 歳の「軍国少年」達は、井上成美校長の訓辞を受けます。それは

「おまえたちは戦後のために集められた。戦後の日本のために勉強しろ」

というものです。

早坂さんはこう言っています。

「腰が抜けるほど驚いた。戦っている最中に戦後とは何だ。必ず神風が吹き、日本は勝つと信じていたのに『この戦争はもう負け』と言う。僕らは『日本には不沈戦艦大和があります』と食い下がったが、『諸君、沈まない船は船とは言わない。大和はもう無残に沈んだ』と言う。人生最大の衝撃でした」

「なんと、兵学校では英語の授業が行われ、土曜日には西欧のクラシック音楽を聞かされた。なぜ日本人はオーケストラ音楽をつくれなかったのか、なぜ日本は負けたのか。相手と自分を知れという。本土決戦を陸軍は標榜するが、民族が減びて何が国体護持だ。おまえたちは戦後どんな日本を作るのか必死に考えろと言われた。僕はその言葉胸に刻んできました」

「戦後 68 年間、日本人は他国へ出かけて一人の敵兵も殺さなかった。これを最高の誇りと考えなければいけないのです。今の戦争放棄の憲法を押しつけだなどと主張する人がいるが、とんでもない。戦争放棄を選んだ背景には、第二次大戦で亡くなった 300 万人を超える兵士や市民の血と涙の叫びがある」

「僕のいところに、ビルマのジャングルで死んだ『ゲン兄ちゃん』がいます。半分水に浸かり、ケガで歩けなくなった彼は、母国に体を向けてくれと戦友に頼んで独り死んだ。何百万人の日本兵の血と何千万人のその家族の涙が戦争放棄の憲法を産み出したことを、今の日本人は忘れてはいけない」

日本海軍に存在した「半沢直樹」、いかがでしたか？日本の官僚的組織は戦前であれ、現代であれ、一旦一つの方向へ動き始めると、それが正しかろうとそうでなかろうと、軌道修正が難しくなるという特徴があります。「KY」という言葉があるように、皆が空気を読み、

たとえ方向性が正しくないと感じていても、わざわざ波風を立てて、自らの立場を危険にさらしてまで軌道修正しようとする半沢や井上のような人物は稀有な存在なのです。それを我々日本人は薄々認識しているので、「半沢」は面白いと感じるのです。たかがドラマ、されどドラマ、今回の「半沢」は、一人一人が「日本人の組織」についてもう一度考え直すよい機会なのかもしれません。